

J-21

秋田県小坂町まちづくり計画

その1 廃線により産業と観光と暮らしが共存する町の提案

Kosaka Town, Akita Prefecture Planning

Part1 Proposal of town where industry, sightseeing, living coexist by waste line

佐藤信治², ○蒲生良輔¹, 永富快¹, 千葉雄介¹, 青木絵子³, 赤堀厚史³, 勝部秋高³, 桜井南実³, 篠原健³, 住吉文登³, 高橋遼太郎³
 Shinji Sato², *Kai Nagatomi^{1*}, Yusuke Chiba¹, Ryosuke Gamo¹, Eiko Aoki¹, Atsushi Akabori¹, Akitaka Katsube¹, Minami Sakuraku¹, Ken Shinohara¹, Humito Sumiyoshi¹, Ryotaro Takahashi¹

In Kosaka Town, the declining birthrate and aging of the population is remarkable and the population declining remarkably, and the number of people with declining population declined from 15,280 in 1960 to about 5,981 in 2008. But at the mine There are many charms as a prosperous town of prosperous history and culture, among which the old Kosaka railway's abandoned line surrounding the town is a very historical one as a symbol of the prosperity of the town in the mining industry once, We are very familiar with it, so by utilizing the unused wireline, the whole town will be connected and we propose to activate the economy of the town by sightseeing.

1. はじめに

小坂町は秋田県の中でも人口減少が激しく、少子高齢化が進んでいる。昭和40年においては15,280人であった人口が、平成20年においては5,981人までに落ち込んでいる。しかし鉱山で栄えてきた歴史と文化の豊かな町としては多くの魅力が残されている。中でも町を取り囲む旧小坂鉄道の線路跡は、かつて町が鉱山産業で繁栄してきた象徴として現在でも市民に広く親しまれている。本提案は、その利用されていない線路跡を活用することで町全体が繋がり、さらにこれを観光施設化することによって、町の経済を活性化させるための提案を行うものである。

2. 計画背景

2. 1. 訪日外国人の増加

今日、日本のインバウンドツーリズムは、史上空前の盛り上がりを見せており、訪日外国人旅行者は増加しつづけ、過去最高の数字を更新している。そんな中、訪日外国人旅行者のニーズが変化してきている兆しがみえる。

今までの「ショッピング」や「食」を目的とした「モノ消費」からリフレッシュや癒しを目的とした「日本文化」を求めるようになっており、こうしたことから日本文化を求めて地方を旅行する訪日外国人が増えてきている。

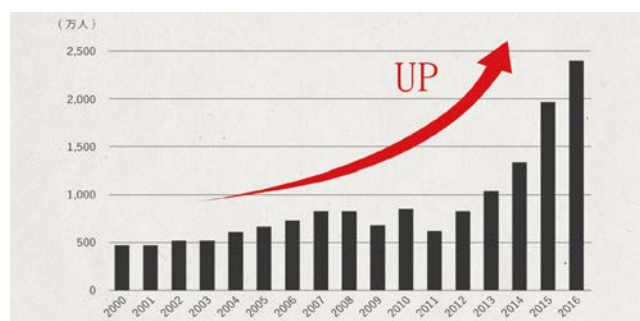


Fig.1 Visiting Japan Foreigner Graph ※1

2. 2. 小坂町のブランド化

訪日外国人が日本の地方に注目している今、小坂町らしい小坂の魅力、強みをおしやすことで他の地方との差別化を計ろうと考える。

そこで小坂の強み、観光に関する調査から、旧鉱山の町としての歴史、文化、そして日本の近代化に貢献した「産業遺産」がそれに当たるとわかった。その中でも、現代の廃線巡りが密かなブームとなってることを考慮し、鉱山を支え、町の人にも馴染みのある旧小坂鉄道の廃線に注目し、計画を進めていく。

小坂町では現在もレールパークやブルートレインなど積極的に観光資源として利用し、日経新聞の特集で8位になるなど注目を集めている。小坂鉄道は鉱山時代から貨物列車として町を支え、現在では観光業で町を活性化しようとしている小坂町の強みとして、町を支えています。

小坂鉄道は今までの小坂の様々な転換期を乗り越え、現在にも残る生きた産業遺産と言え、小坂鉄道という強みで小坂町の弱みを補うことで活気のある町を目指す。

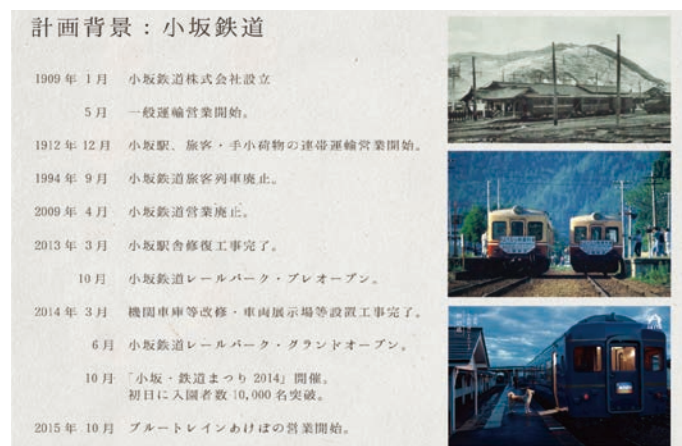


Fig.2 History of Kosaka Town ※2

1 : 日大理工・院(前)・海建 Department of Oceanic Architecture & engineering, CST., Nihon-U.

2 : 日大理工・専任講師・海建 Assitant Prof. of Oceanic Architecture & Eng. College of Technology, Nihon Univ. Dr. Eng

3 : 日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture & engineering, CST, Nihon-U

3. 基本計画

まず、小坂町の観光団体間での連携の不十分が観光の活性化にあたり問題となります。そこで廃線による観光施設や観光業者の連携を促す計画をいたします。小坂町の真ん中に廃線があるため、その立地を利用し廃線を空間として利用することで観光関連施設を繋いでいく計画をする。

次に観光客誘致に対する環境が不十分であることから観光客、周辺住民の為の情報共有、相互干渉の拠点を計画する。観光客誘致の為には地域が一体となった環境づくりが欠かせないが、周辺住民の巻き込みが足りないのが現状である。そこで廃線が住宅街までも伸びていることを利用し、線路空間によって観光関連施設のみならず、周辺住民をも巻き込み、そこにLDKの機能を挿入することで観光客と住民が一体となれるような場所をつくる。

これらによって線路空間は地域住民が共同に使える小坂の広場となり、町の人たちにとって第二の家となる。線路空間にできた新たな小坂の広場は情報共有、相互干渉の拠点となります。観光業と地域住民、観光客が入り乱れる空間では、ワークショップなどを行うことで地域住民が観光資源の価値を再認識し、住民の率先的なまちづくりを促進していく。

最後に町の立地が観光地間の通過型となっており、観光宿泊施設が少ないことから、観光客の為の宿泊施設、食事処の計画をいたします。現在の小坂町は通過型観光地のため滞在時間が短くなるという現象が起きている。その為、観光客の購買、消費は少なく、地域経済への貢献度はかなり低い。そこで今回の計画では滞在型観光地による地域経済の活性化を目指すために、宿泊施設をはじめとした滞在のための施設を線路空間に計画し、滞在する価値を高める為に夜まで楽しめるプログラムを組み込み、夜まで楽しむことのできる小坂町は観光客の滞在意識を促進する。

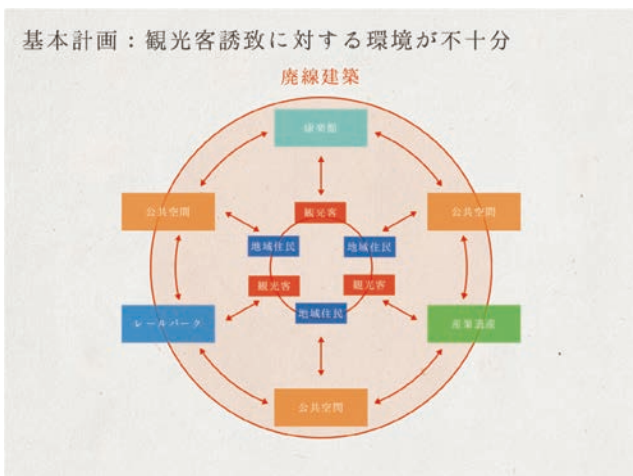


Fig.3 Plan Diagram

4. 建築計画

廃線空間を建築化することで中に機能が入るとともに、空間として街全体に繋がりをもたせるようなものとする。構造は上州富岡駅の鉄骨レンガ構造を参考にこの街にふさわしい景観と構造を創り出す。小坂町を彩ってきた木骨煉瓦建築を意識して、煉瓦を単なる化粧材としてではなく、構造体の一部として機能させ、歴史に敬意を表しつつ、それを未来に向けて発展継承させていく、伝統と革新が共存する町を作り出す。建築内は、日本三大美林の一つであり、リラックス効果の高い秋田杉を活用する。そうすることで廃線空間は人々の集まる心地いい空間へと変貌し、作り出された建築空間はより良い環境を生み出し、伝統と革新が共存する町となる。

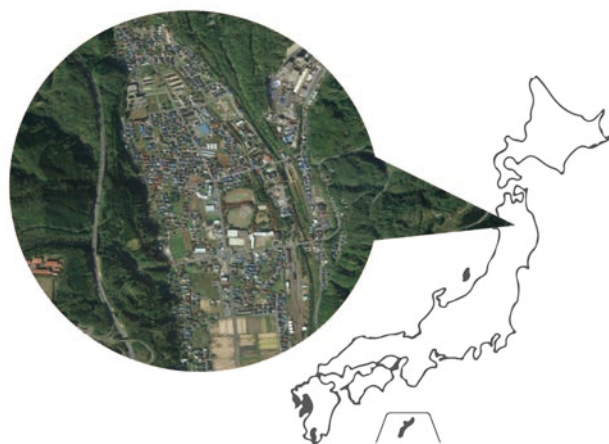


Fig.4 Location



Fig.5 perspective

5. 参考文献

- [1] 玉村雅敏:「地域を変えるミュージアム」, 2013 年 4 月
- [2] 小坂町役場:「小坂町」 < <http://www.town.kosaka.kita.jp/index.html> > 2017 年 9 月 24 日アクセス
- ※1 日本政府観光局.「統計データ」. < <https://www.jnto.go.jp/jpn/index.html> > 2017 年 9 月 24 日アクセス
- ※2 小坂町の歴史:「小坂町」 < <http://www.town.kosaka.akita.jp/railhistory/747.html> > 2017 年 9 月 24 日アクセス

1 : 日大理工・院(前)・海建 Department of Oceanic Architecture & engineering, CST., Nihon-U.

2 : 日大理工・専任講師・海建 Assitant Prof. of Oceanic Architecture & Eng. College of Technology, Nihon Univ. Dr. Eng

3 : 日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture & engineering, CST, Nihon-U